

農林省統計調査部（英文）

「食糧の需要分析」

Demand Analysis for Foods—March, 1960—

三 枝 義 清

第三章に「戦後の食糧需要の発展」が論じられているが、本書の主体は都市家計（昭和三十二年度の）並びに農家（昭和三十一年度の）についてのクロス、セクション分析にあると思う。分析方法は都市家計、農家共に殆んど同一で、ただ農家については農区別、都市家計については、三、六、十一月別が追加されている。

本書におさめられた分析作業の主眼がどこに置かれているのか明らかなではないが——結果から判断して恐らく、従来一般の分析者には計測の困難であった個別品目の所得弾性値並びにその付属資料を提呈すると云うサービスにあるものと類推される。現在の如く需要予想の必要が高まった状況下では、この種の資

料は広く利用されるものと思われる。

本書では、分析方法について、簡単な注釈が付されているが、いずれも表面的で不満足である。統計分析上で気のついた点を述べると、本書で特に企図した問題に函数型の選択がある。ここでは所得階級の平均値を手掛りにして最小自乗法を適用、各品目毎に (Y) を求めているが、階級内の世帯間変動を考慮すべきであろう。多数の項目について、便宜的な計算を行なうよりも、少数項目についてより追求した分析を行なうほうが、利用者には役立つものと思う。都市家計の分析では、三、六及び十一月の他に三カ月平均のデータで回帰分析を行なっているが、これらの推定値の解釈には可成りの注意を要するものである。英文にして結果を発表する場合、“Average”として求めた回帰式のパラメーターには、注釈が必要である。家計調査の調査設計、並びに集計方式を考えれば明らかなように、“Average”として求めた回帰係数は、三カ月のデータを単純にプールして推定したものであるから、回帰係数は所得間変動以上に、同一所得階級内の月間変動の影響を蒙っている。従って、この推定値を年所得を独立変動に置いた「所得—需要関係」に代用することは、無意味なのである。この点は国内の利用者には了解済みであろうが、英文にして外国に、発表する場合には、明確にしておかねばならぬと思う。

書評 農林省統計調査部（英文）『食糧の需要分析』

利用者として基礎的な問題について多くの要求があるが、引き続き分析の進められていくことを切望したい。